

第40回高齢者福祉研修会 講演再録

人は”命“だけでは生きられない — キリスト教精神に立った高齢者介護とは何か —

佐々木 炎 (日本聖契キリスト教団中原教会牧師・NPO法人ホッとスペース中原)

キリスト教精神に立って、どのように高齢者の介護をしていくか。このことを考えるときに、私は、その枠組みがとても大事だと思っています。

目の前にいる利用者を見るときに、私たちは、高齢者のどこを見るのか、ということになります。

アセスメントをして、高齢者のいろんな課題を抽出して、ケアプランをつくっていく。こういうことを、私たちは、日常の業務としてやっているわけです。

しかし、例えば、ある高齢者が一つの行動をする。そのときに、その人がどういう人なのか、ということを考えて理解をしていく。ここが、私たちにあって、とても大事ではないかと思うのです。

私たちは、アセスメントをして、ケアプランをつくっていく。こうした、科学的手法にだけ頼ってしまって、人を見る前に、つい課題を見ようとしてしまう。私は、その前に、この人がどういう人なのかというところから、入って行く必要がある、と思っています。

そういう意味で、私たちが、キリスト教精神に立った介護とは何か、ということ

きに、まず心構えが求められているのではないかと思うのです。

まず、私たちが、目の前の当事者や利用者に対して、この人も人間として尊厳を持った存在であるということを、深く認めることが求められている、ということになります。

何も、壊れた車を直すのではない。相手は人間であって、課題を解決すればいいというのではない。人をケアするのである。これが、私たちの向き合う姿勢だと思うのです。

私たちがしなければならないのは、利用者に対して、一人の人間の尊厳を支えることなのだ。ここの心構えが、大事だと思っています。

尊厳の「尊」という字、象形文字では、酒樽を両手で抱える、という意味です。酒樽とは何かということ、お神酒です。つまり、大事な神の道具です。

尊いという言葉は、神や仏にしか使わない言葉です。地蔵尊あるいは本尊というように、神を表すのです。

私たちは、利用者を、余りに軽々しく扱っていないでしょうか。神聖さを理解

しているでしょうか。その方が壊れないように、大事に守っているでしょうか。

人間という、神聖さを持ったものとして、一人ひとりを見つめていく、そこにキリスト教精神に立った福祉がある、そんなふうに思っています。

ところで、人間の尊厳というとき、次のような意味があるのではないか、と思います。

まず第一に、神の似姿としての存在価値ということ。人間は神の似姿として創造された、ということ。

第二に、神の愛の対象としての価値。イザヤ書四三章では、「あなた(人間)は高価で尊い」といわれています。

第三に、神の憐れみの対象としての価値があります。み子をささげるほどに、神様は私たちを愛しておられる、ということ。

そして第四に、私たちは、神の国の一員である家族なのだ、それゆえに、神は私たちを価値あるものと見てくださっている、ということ。

信仰のあるなしに関係なく、すべての人は、神の似姿としてつくられている。

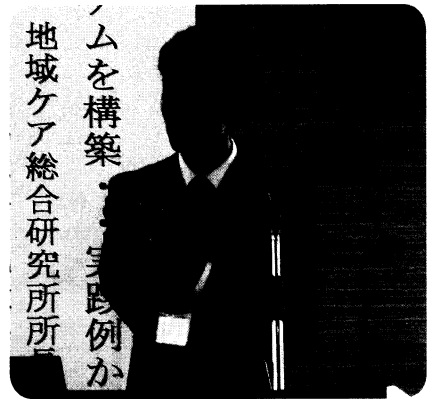
だから神聖さを持っている。そこを私たちは見る必要があるのです。

この人はこういう症状があつて、だから、こういうサービスを組み立てていけばよい。そんなことをしていませんか。ただ問題解決をしていくことだけを、見ようとしたなら、私たちは、コンピュータ処理をしているだけなのです。

福祉の「福」は、示へんに富むと書きます。また、「祉」は、示へんに止まると書きます。示へんは神を表すものです。神様が富を与え、足を止めてくださっている。その恵みを受け取る。それを提供する。それが福祉ということなのです。

「いかなる人間も、その人に独特な固有の価値をもっている。また、生まれながらの尊厳、価値、基本的権利、ニーズをもっている。さらにいかなる人も、人間すべてに普遍的に共通する価値をもっている。この普遍的に共通する価値は、創造主である神がわれわれに与えたものである」

これは、有名な、バイステイックのケースワークの原則といわれます。



佐々木 炎氏

一人ひとりを、そのようにして見ていく。ここに、まず立脚することが求められている、というのがです。

それでは、具体的に、私たちは介護の現場でどうすればよいのか。そこで大事なことは、一人ひとりのユニークなことを、認めることです。それが、尊厳を認めるという事です。

施設にいらつしゃる、お年寄りの皆さん。つまらない生活を送っておられませんか。朝七時に起き、寝るのは九時、やることもなく、一日ボーっと時間がたつていく。こうして、高齢者は個性がなくなっていくのです。ユニークさがなくなっていくのです。

一人一人のお年寄りは、もっとユニークなはず。そこを認めるということが大切です。

だから、社会福祉法の三条には、こう書かれています。

「福祉サービスは、個人の尊厳の保持を旨とし、その内容は、福祉サービスの利用者が心身ともに健やかに育成され、又はその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるように支援するものとして、良質かつ適切なものでなければならぬ」

「人間の尊厳を支える」ケアの実践を

課題ばかりを見ていたら、どうでしょう。例えば、ここに八十一歳になる男性の方がいらつしゃいます。仮に岩崎昭さんといっておきます。

この昭さんを見た時、どれだけ課題があるかを、頭の中で列挙しながら、その解決をしようとしてしまう。

そのように問題を集めていくと、この昭さんはどうなるでしょうか。後期高齢者で、男一人のアパート暮らし、認知症で、持病があり、軽い脳梗塞を抱え、幻聴、すり足、転倒が多く、尿失禁、便秘があり、尿臭のする部屋で、更衣を拒否し、親子の関係が悪い。昼夜逆転で、夜間の徘徊があつて、警察の厄介になつて、家の外で転んで、一人であることが困難……

こんなことばかり集めたら、この昭さんという人は、とんでもなく大変な人、何もかも、やってあげなくてはいけない人、と思つてしまいます。

しかし、ホントにそうでしょうか。一人ひとりには、出来ないこともありますけれど、まだまだ力があることを信じ

生活を営むことができるように支援するものとして、良質かつ適切なものでなければならぬ」

個人の人尊厳の保持を旨としなさい、と、

八一年間も生きています。結婚したことがあり、子どもがいる。歩くことが出来て、一人で生きています。近くに娘さんがいる。病院につながつていて、自分のことを報告できる。買い物に行ける。排泄を処理できる。仏壇の手入れができる。外まで歩くことが出来る。トイレまで行ける。きれいな好きで食事の意欲がある。一人で頑張ろうとしていて。沢山の良いところがあります。

良いところが見つかつてくると、私たちの認識が変わってきます。まだまだ可能性はある。まだまだ頑張れる。だから大丈夫、一緒にやつて行つてね、なんてことが、心から言えるのではないのでしょうか。

一人ひとりに、まだまだ能力(賜物)が隠されている。その出来るところを、支えていったらどうでしょうか。人間は、他者に認められることで、三つの力が働くと言われています。

書いてあるのです。さらに、キリスト教精神に立つということの二つ目は、人間には力があることを、しっかりと認識することです。

まず、リカバリー(回復力)、前向きに生きようとする事です。また、レジリエンス(跳ね返す精神的な回復力)、悪い状態だけポジティブに捉え、何とかうまくやつて行こうとする事です。そしてペルソナ(人格)、周りの人の助言を聞いて、最善のものを選ぶ事です。

人間には、生まれながらに備わつていなくても、まだ使われていない能力が、実に九四パーセント潜在能力として残つている、と言われています。

確かに、六パーセントの力はなくなつているかもしれませんが、あとの九四パーセントが残つていて、これを引き出せば、何とかなるのではないのでしょうか。だからこそ、介護保険法で、こう書いてあるのです。

「尊厳を保持し、その有する能力に応じて、自立した生活を営むことができるよう……」

この、神様から与えられた能力を、私たちは信じ、そこを共に見つけていったらどうでしょうか。